

このところ絵と漱石ばかりやっているが、昨晚「シャンソン・フランセーズに触れていない」反省的寂しさが急に心にやってきた。その治療薬として村上春樹氏の小説を読んで眠りについたら、また変わった夢を見た。私の夢にはストーリーがある。夢の中で私は教育機関で働いていて、自分の部署とは関係ない男性のための調べ物に奔走しているがなかなか解決しない。更に私は学生でもあるらしい。その調べ物に時間を取られて教室へ遅刻して入ったら、1時間目が終わったところで、音楽の講義に代わっていた。そこで私は一人の女性と話す。その人は「私はアメリカ人に見えるか、イギリス人に見えるか？」と問う。私は顔立ちと解放的な様子から「アメリカ人」と答えるが、彼女は実はイギリス人で南部の方の生まれだと言う。そこへ色の黒い先生が入ってきて、ギターを弾くから『ダイアナ』を歌えと言う。夢はそこで終わった。

目覚めた私は夢の意味を整理する。すると漱石の『草枕』で触れたイプセンの『人形の家』に著されたひとつの事実に新たに気付く。そのように一見関係のない夢から私は勉学の発展に役立つヒントを時々もらっているようだ。そこで、夢の中にやってきた歌についてもせっかくだから意味を調べてみようと思う。カナダ出身のポール・アンカ(Paul Anka 1941~)が1957年に発表した『ダイアナ(Diana)』という歌を、本当は絵を描くはずだったきょうの午前中を使って。これも訪ねてきてくれた歌との縁。

『僕は若い君は年取っている。僕には解っていた、最愛の人だと。僕は彼らが何と言おうと気にしない。だって常に願っているから。君と僕は自由だ。樹の上に追い詰められた鳥だとしても。ああ、傍にいてくれ、ダイアナ。君に抱きしめられるとぞくぞくする。最高の恋人。僕は君を愛しているけれど、君は僕を愛しているかい？ああ、ダイアナ わかるだろう？心の底から愛している。永遠に離れたくない。ああ、一緒にいてくれ、ダイアナ。最愛の人、愛する人。他にはいないと言ってくれ。心の底から愛している。ああ、ああ……。僕の心を捉えたのは君だけだ。心を掻き乱すのは君だけだ。君の愛の腕の中に抱かれているとき、僕は君の全ての魅力を感じることが出来る。抱きしめてくれ、しっかりと。思いっきりギュッと抱きしめてくれ。ああ、傍にいてくれ、ダイアナ。ああ、ダイアナどうか、傍にいてくれ、ダイアナ』

状況がどうであろうと唯一の人。これは紛れもない真実の愛である。フランスの『愛のために死す(MOURIR D'AIMER)』『愛の讃歌(HYMNE A L'AMOUR)』イタリアの『愛は限りなく(DIO COME TI AMO)』愛は人類共通で、音楽のジャンルを問わない。ただ国別に女性側から歌うか男性側から歌うかの比率が変わるだけである。いずれにしても愛は何らかの方法で伝えなければ成就の可能性はない。また人々はその結実を願っている。だから愛の歌は多くの人々の心を捉え、その感情を共有することが出来る。歌という形は詩的に美しいことなのかもしれない。存在を知っていても興味を示さなかった歌、存在自体を知らなかった歌、音だけで耳を通り過ぎる外国の歌、いろいろある。私は夢に出てきたお蔭で、またひとつ愛の歌の意味を知った。

ところで、愛といえばやはり絶賛されるのはエディット・ピアフの『愛の讃歌』であるが、今年がピアフ没後50年だそうである。世界で歴史に刻まれた人の生誕何年、没後何年のイヴェントはよく重なる。今年が音楽家イヤーか。いずれにしても皆人の愛を捉えた人物だ。何百年も人の心を捉える藝術は愛から発するのだろう。(2013.3.17)